

2011年12月10日（土曜日）ベケット研究会シンポジウム要旨

（於：甲南女子大学）

異質なものの“arriver”する場

——ベケット作品における笑い、死者、想像力

司会：堀 真理子

ベケット前期演劇における喜劇的要素——ベルクソンの笑いと言

武部 好子

ベケット演劇は悲劇か、喜劇か。そのどちらでもない。ベケット演劇は、「悲喜劇」である。本稿はまず、サミュエル・ベケットの前期演劇におけるユーモアをベルクソンの哲学から考察する。次に、狂言にみられる型や物真似の要素にも焦点を当て、ベケット「悲喜劇」における笑いを抽出する。

暗闇に見えるベケット演劇の世界に、ベルクソンの笑いの概念を通して、光を当てよう。

「或る情況が全然相独立している事件の二系列に同時に属しており、そしてそれが同時に全然異なった二つの意味に解釈できるとき、その情況は常に滑稽である。」¹

この二つの異なる状況、悲劇と喜劇が同時に成り立つところに、ベケット演劇のユーモアが存在する。

狂言は、元来、物真似、歌舞音曲、曲芸、サーカス、滑稽なダイアログなどから成る猿楽を基礎としている。ベケット前期演劇における笑いも、これらの猿楽の要素が大きく貢献している。実際にベケット前期演劇を狂言役者が演じた上演作品では、ベルクソンが定義する笑いが具現化されている。つまり、機械性・反復性・可逆性に、狂言の「型」がマッチし、ベケットのテキストが本来放つユーモアが際立ったといえる。

注（1） アンリ・ベルクソン『笑い』林達夫訳（岩波文庫 1938年）92頁。

『クラブの最後のテープ』における二項対立のイメージについての考察

景 英淑

『クラブの最後のテープ』(1958)には、それ以前の演劇作品に比べ、女たちについての描写が豊富である。それらは声としてテープレコーダーの中に貯蔵された記憶の一部としてではあるが、特に 39 才の若きクラブがボートの上で或る女と過ごした場面は、舞台の上に登場する老人クラブが与える惨めな印象とは逆に、若きクラブの輝く瞬間として残されている。このボートシーンの女を含め、クラブのテープレコーダーによって語られる女たちは、老人クラブの若き時代の恋人たちと見なされることが多く、時にはベケット自身の伝記の中に現れる人物との関連性までもが言及される。しかし、『クラブの最後のテープ』の女たちについての描写には、比喩や象徴性を持った表現が多く、彼女らが確実にクラブの過去に存在していた事を裏付ける証拠は戯曲の中には与えられていない。

このような点を踏まえると、テープレコーダーに録音された女たちが、老人クラブの過去に実在していたとは言い難い。テープレコーダーから流れる内容には、白と黒、光と闇、男と女のような二項が時には対立し、時には混じり合う場面が多い。これらの場面は、架空のイメージとして老人クラブと観客の頭の中で想像される。

今回の発表では、『クラブの最後のテープ』の中に顕著に表れる、白と黒に代表される二項のイメージの意味を、様々な女たちについての描写やテープレコーダーという機械の特徴を踏まえつつ解く。また、ボートシーンに表れる二項と、散文『死せる想像力よ想像せよ』の中心的なイメージである円の中の男女との関連性を探る。

ベケットと歓待

垣口 由香

ベケットという作家は人生の大半を異邦人として生き、母語のみならず異国の言語によっても作品を書いた作家である。そんなベケットの二つの劇作品『ゴドーを待ちながら』と『勝負の終わり』を、ここではデリダが後期著作において展開した「歓待」という観点から論じてみたい。デリダによる「歓待」は、「無条件の歓待の法 (the unconditional law of hospitality)」と「条件つき歓待の法 (the conditional laws of a right to hospitality)」の二律背反として理解される。ベケットが描く歓待もまた二律背反をなしている。本論では、これら二法の矛盾に関し、ベケットがいかなる着地点を示しているのかを明らかにしたい。

『ゴドー』からは、二つの成就しない歓待——到来を期待されるゴドーによる歓待とゴドーの代理としてやって来るポッツォによる歓待——について論じ、これら失敗に終わる歓待から、死者の無条件の歓待という可能性が見てとれることを明らかにする。

他方、『勝負の終わり』に関しては、ハムとクロブの歓待的關係について、その依存性と主客の転倒可能性を論じる。その際、クロブがハムの主人としてのアイデンテ

ィティを保障する内と外を隔てる壁を形成していることと、ハムによりクロブに与えられた言語によって、この二人の歓待的關係は内側から脅かされると同時に維持されていることを示す。また、ハムと彼の物語の關係も「歓待」の観点から考察を試みる。

後期ベケットにおける想像力について

井上善幸

ここでは後期ベケットにおける *imagination* の解体学を論じる。このイメージを解体するに際し、ベケットはいくつかの *arts* を用いている。その中でも特に着目したいのが、文法であり、算術である。

一つ目は、ベケットが *body* を文法の観点からとらえようとしていたのではないか、ということである。だからこそ *Imagination morte imaginez* (1965) などのテキストにおいて、アルファベットが多用されているのではないか。二つ目は、ベケットは同時にこの *body*、さらにはその *body* を収容する場を、数によっても表現しようとしているのではないか、ということである。だからこそ *Company* (1980) などの後期テキストにおいて、数というものが重要性を帯びているのではないか。そのような *arts* の応用により、ベケットは *body* を究極的な、分割不可能なアトム的様態へと縮減し、ついには精神の代数学を産み出そうとしたのではないか。

Imagination について考えることは *memory* についても考えることであり、さらには後期ベケットにおける *reason* についても考えることにつながる。それらの連鎖を、中世から 18 世紀までを中心に、精神史的アプローチによって分析する。